

若者の生活と学びに 関する調査 2024

東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所は共同で、
2024年2～3月に19歳の若者を対象にした調査を実施しました。
この調査は、2023年（調査対象者が18歳の時点）まで
「子どもの生活と学びに関する親子調査」で9年間追跡してきた
調査対象者を含むパネル調査として行われました。
ダイジェスト版では、調査延長の1年目の結果から、
19歳の若者（調査対象者全体）と大学生の生活と学びに関する
意識と実態をご紹介します。



「若者の生活と学び」研究プロジェクトについて	p.2
調査概要	p.3
基本属性	p.4～5

1 若者の生活時間	p.6
①睡眠時間・人と過ごす時間・メディアの利用時間	
2 大学生の学習の実態と意識	p.7～14
①入学前の様子	
②学習時間	
③大学での学び	
④学びの機会や経験	
⑤学習動機	

⑥大学教育に対する意見	
⑦通っている大学に対する評価	
⑧資質・能力に関する自己評価	

3 将来展望や満足度	p.15～19
①就労観	
②将来に対する意識	
③能力や社会に対する意識	
④結婚に対する意識	
⑤生活や学びに対する満足度	

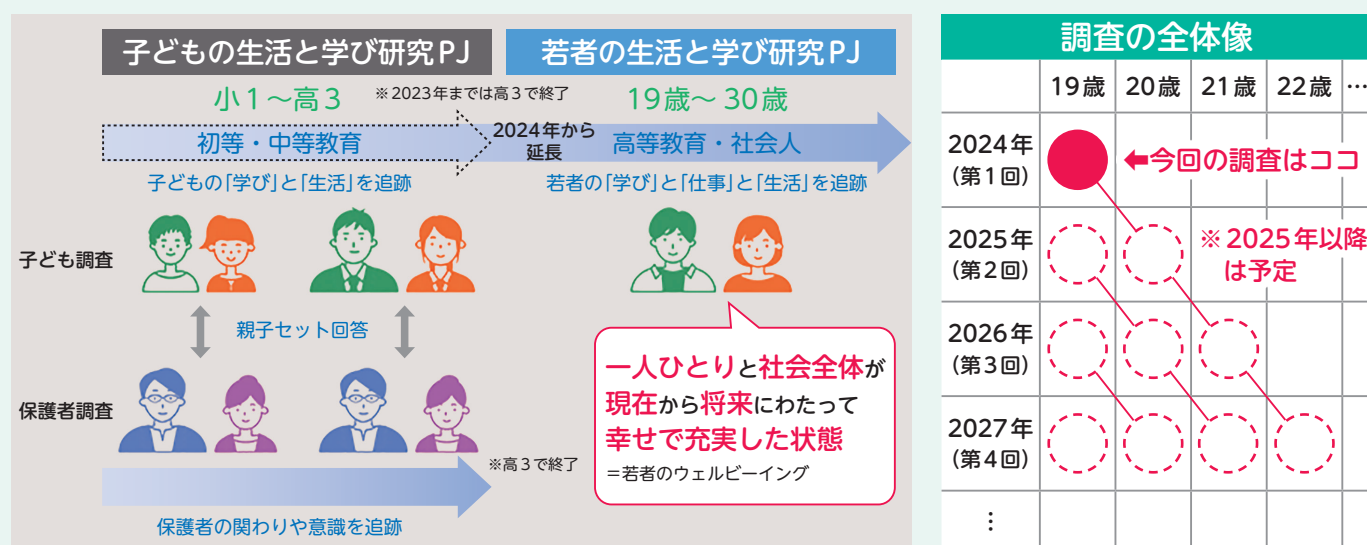
調査企画・分析メンバー	p.20
-------------	------

「若者の生活と学び」研究プロジェクトについて

東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所は、2023年より19歳以上の方を対象にした「若者の生活と学び」研究プロジェクトを立ち上げました。このプロジェクトでは、2015年に開始した「子どもの生活と学び」研究プロジェクト^{*}で行っている小学1年生(6歳)から高校3年生(18歳)までの調査を延長して、19歳以降の若者の学びや仕事、生活の実態や意識を追跡して調査します。

このダイジェスト版では、この研究プロジェクトが実施した「若者の生活と学びに関する調査」の第1回調査(19歳対象)の結果を紹介します。

※「子どもの生活と学び」研究プロジェクトは、本プロジェクトと同様に東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所による共同研究です。



「若者の生活と学びに関する調査」の特徴

1 学生や社会人の
「現在」と「時代変化」を
とらえることができる

19歳以降の若者に対して、毎年継続して調査を実施します。「子どもの生活と学び」研究プロジェクトの終了者(高校3年生・18歳)が毎年1学年ずつ本プロジェクトに移行してきます。調査対象となる年齢の増加にしたがって「現在」の様子(1時点の年齢による違い)や経年比較による「複数時点の時代の変化」をみられるようになります。

2 小学生から社会人までの
「成長」のプロセスを
とらえることができる

「子どもの生活と学び」研究プロジェクト(小学1年生から高校3年生まで)と同じ対象に調査を継続して実施します。これにより、同じ人が小学生時代から社会人になるまで、どのような経験を経て成長していくのか、生徒・学生から社会人に移行していくのかといった「複数時点の個人の变化」や「変化に影響する要因」(因果関係)を明らかにすることができます。

3 学び、仕事、生活に関する
意識や実態を、
幅広くとらえることができる

調査では、学習(まなぶ)、職業(はたらく)、社会(つながる)、家庭(くらす)での生活を中心に実態や価値観などを幅広くたずねています。調査対象には学生だけでなく社会人も含むため、多様な属性の若者の日々の様子をとらえることができます。小学生時代からを含めると2万人を超えるモニターを対象にした国内では類のないパネル調査です。

調査概要

調査テーマ

若者の生活と学びに関する意識と実態

同一の若者を対象にした縦断調査(パネル調査)。2024年に19歳を対象に第1回調査を実施。2025年以降は、同じ対象者に継続して調査を依頼するとともに、毎年、新たな19歳を追加して調査を行う予定。

調査時期

第1回調査(今回)：2024年2～3月

調査方法

郵送にて調査を依頼、Webにて回答

調査対象

2004/4/2～2005/4/1生まれの(調査実施年度に19歳を迎える)若者
1,350名

	継続モニター	新規モニター	合計
発送数	631	719	1,350
回収数	369	549	918
回収率	58.5%	76.4%	68.0%

※「継続モニター」：「子どもの生活と学び」研究プロジェクトの調査モニターに「若者の生活と学び」研究プロジェクトの調査モニターの継続を依頼。この依頼に許諾した方。

※「新規モニター」：2004/4/2～2005/4/1生まれの若者を、高校3年時の全国7地域の生徒比率(文部科学省「学校基本調査」令和4年度)に従って抽出し、「若者の生活と学び」研究プロジェクトの調査モニターとして協力を依頼(2024年1月)。この依頼に許諾した方。

調査内容

※本ダイジェスト版に右記の一部の内容を掲載している。

■本人の属性や意識

生年月/性別/居住する都道府県/現在の立場/資質・能力に関する自己評価/就労観/将来意識/能力や社会への意識/結婚への意識/生活や学びへの満足度など

■学校での学びについて *学生のみ

学校種/学校設置者/学年/専攻/授業の様子/学びの機会/学ぶ理由/学校の教育に対する意見/学校への評価など

■高校時代の様子について(回顧)

学習時間/進路選択/入学前教育など

■仕事について *働いている人のみ(アルバイト含む)

職種/職歴/仕事上のスキルアップ/学習費/やりがい/働く理由/収入など

■家庭生活について

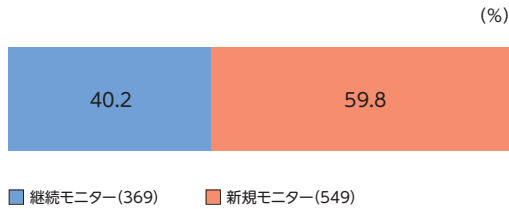
経験/婚姻/ライフイベント/生活時間/同居家族など

※データや解説文の表記に関する留意点について

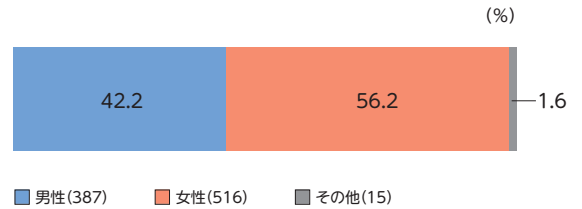
- ・図表内の()は分析対象者数を示す。
- ・本ダイジェスト版で使用している百分率(%)は、各項目の算出方法に沿って出した値の小数点第2位を四捨五入して表示している。その結果、数値の和が100にならない場合がある。
- ・本ダイジェスト版の解説文では、項目の表記を省略する場合がある。
- ・本ダイジェスト版の解説文では、2024年3月時点で、「短期大学」「四年制大学」「六年制大学」に通っていると回答した学生(709名)を「大学生」と表記し、かつこのうち、学年について、1年生と回答した学生(704名)を「大学1年生」と表記している。
- ・本ダイジェスト版の解説文では、入試方式別、入学偏差値別のデータは2024年3月時点で、「短期大学」「四年制大学」「六年制大学」に通っている大学1年生704名を対象に分析している。

基本属性（全体）

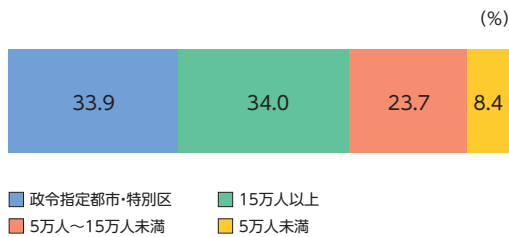
●継続モニター／新規モニター



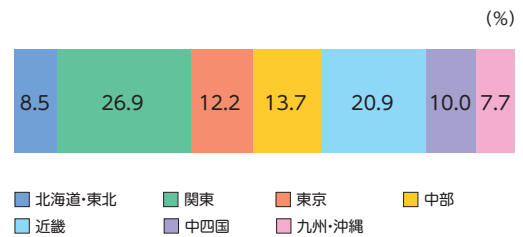
●男女別



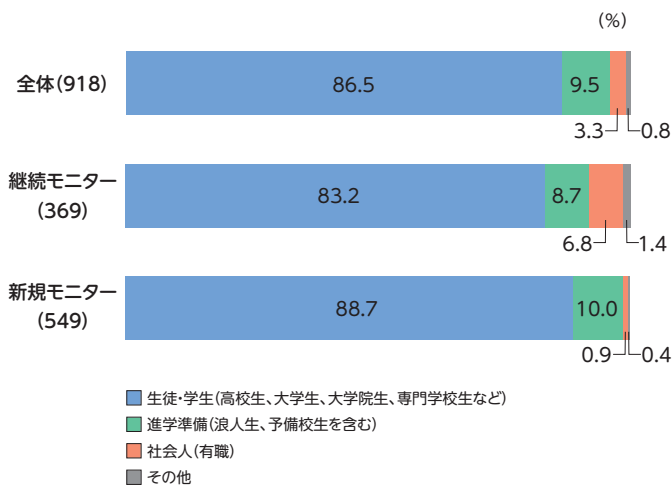
●居住する自治体の人口規模



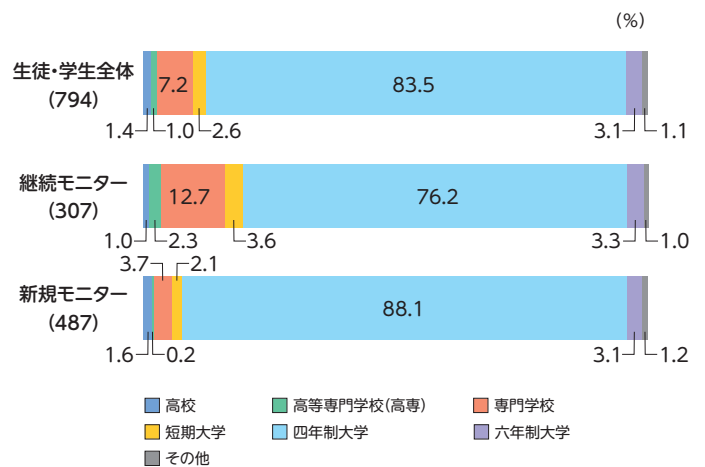
●居住する自治体の地域



●現在の立場



●学校種



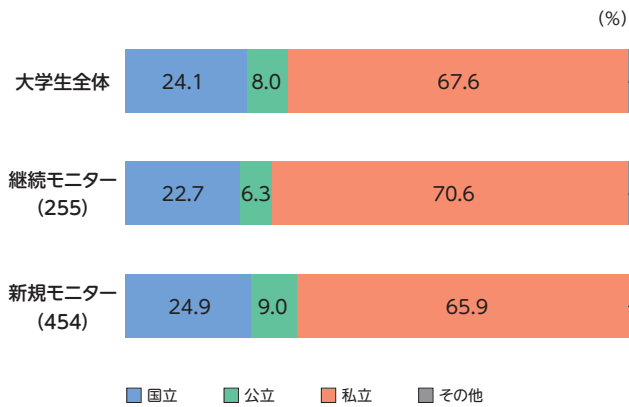
注1 「その他」に、「大学院」と回答した人を含めている。

注2 数値は、生徒・学生(高校生、大学生、専門学校生など) 794名を対象に算出。

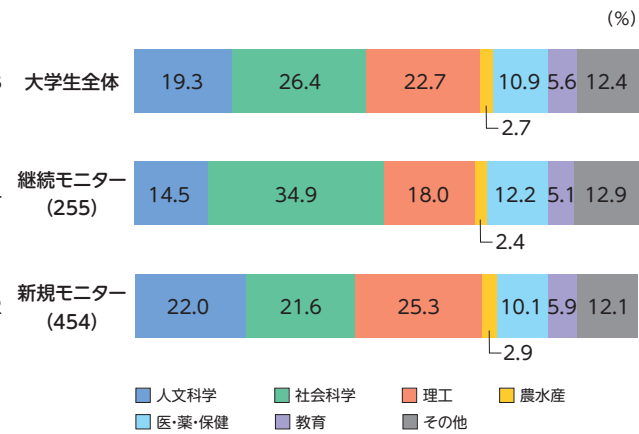
基本属性（大学生）

※本ページの図は、2024年3月時点で、「短期大学」「四年制大学」「六年制大学」に通っている709名を対象に、「入試方式」と「入学偏差値」の2つの図は、大学1年生704名を対象に分析。

●大学設置区分

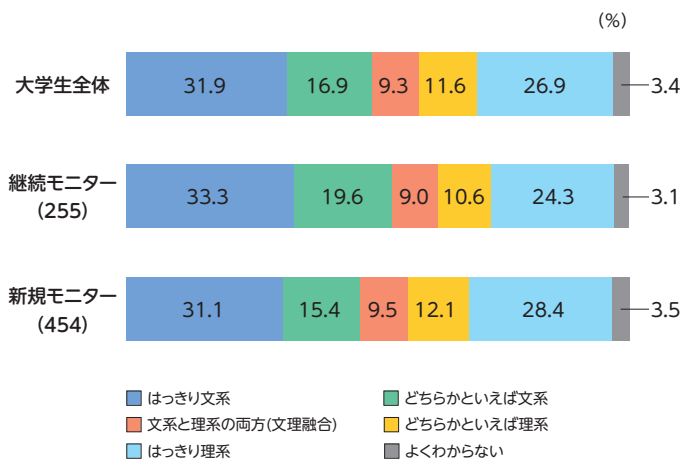


●学部系統

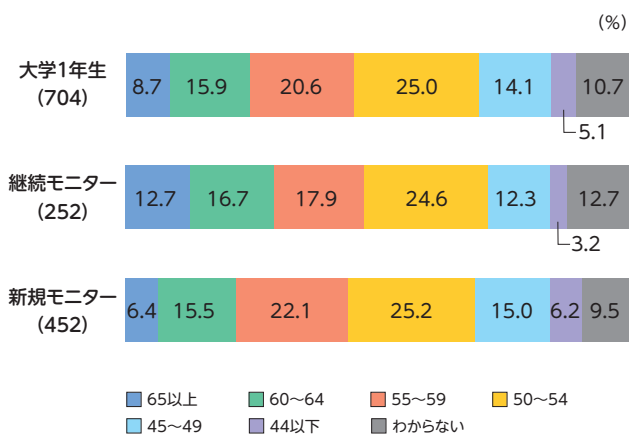


注 学部系統をたずねた質問で、「人文系統(文学、心理学、文化学など)」「外国語学系統」「国際学系統(国際関係学、国際情報など)」を選択した者を【人文科学】、「社会学系統(社会学、社会福祉学など)」「法学系統(法学、政治学、政治経済学など)」「経済学系統(経済、経営、商学、流通学など)」を選択した者を【社会科学】、「理学系統(理学、生命科学、地球環境など)」「工学系統(理工学、システム工、情報工など)」を選択した者を【理工】、「農学・水産学系統(生物資源、獣医、酪農など)」を選択した者を【農水産】、「保健衛生系統(保健、保健医療、看護、看護医療など)」「医学系統」「歯学系統」「薬学系統」を選択した者を【医・薬・保健】、「教育学系統(教員養成、学校教育学など)」を選択した者を【教育】、「生活科学系統(家政、食物栄養、人間発達、保育など)」「芸術系統(造形、音楽など)」「総合科学(総合)系統(総合科学、教養、環境情報など)」を選択した者を【その他】とした。

●文系・理系



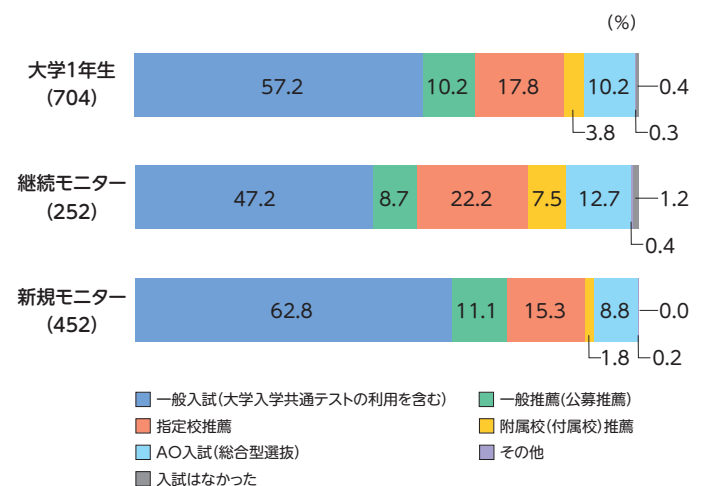
●入学偏差値



注1 「おおむねの偏差値」を回答者が選択。

注2 入学偏差値については、2024年3月時点で、「短期大学」「四年制大学」「六年制大学」に通っている大学1年生を対象に分析。

●入試方式



注 入試方式については、2024年3月時点で、「短期大学」「四年制大学」「六年制大学」に通っている大学1年生を対象に分析。

1 若者の生活時間

①睡眠時間・人とすごす時間・メディアの利用時間

携帯電話・スマートフォンを使う時間の平均は3時間を超える

調査対象者(19歳)に平日1日の生活時間についてたずねたところ、睡眠時間(平均6時間20分)に次いで長いのは「携帯電話やスマートフォンを使う」で、平均は3時間を超える。「テレビゲーム・携帯ゲームで遊ぶ」と「パソコンやタブレットを使う」はそれぞれ1時間程度である。読書(「本を読む(電子書籍を含む)」)は6割が「しない」と回答し、平均は19分にとどまった。また、「運動・スポーツをする」も5割が「しない」と回答(平均27分)し、「友だちと遊ぶ・すごす」は3割が「しない」と回答(平均1時間23分)している。

Q. あなたはふだん(学校や予備校、仕事がある日)、次のことをそれぞれ1日にどれくらいの時間やっていますか。日によって違うときは、平均してだいたい時間を教えてください。

図1-1-1 若者の生活時間(調査対象者全体)

(%)

	睡眠時間	人とすごす時間		運動時間	メディア時間					
	睡眠をとる	友だちと遊ぶ・すごす	家族とすごす	運動・スポーツをする	テレビ・DVDを見る	テレビゲーム・携帯ゲームで遊ぶ	携帯電話やスマートフォンを使う	パソコンやタブレットを使う(仕事で使う場合を除く)	本を読む(電子書籍を含む)	マンガや雑誌を読む(電子書籍を含む)
しない	0.9	30.5	23.1	49.6	30.8	39.4	1.6	36.3	58.5	58.3
5分	0.5	2.0	1.1	3.9	0.7	1.5	0.3	1.7	2.6	3.6
10分	0.1	1.7	0.8	4.6	2.7	2.1	1.1	2.8	5.8	5.9
15分	0.3	2.1	2.1	6.5	2.3	2.9	0.9	3.4	5.2	4.9
30分	0.2	9.6	8.6	13.8	10.2	9.6	5.7	9.9	12.6	14.1
1時間	0.2	20.5	17.0	13.0	23.4	19.2	15.4	20.8	10.2	9.0
2時間	0.2	13.4	12.4	5.1	17.4	11.9	22.5	11.7	3.1	2.8
3時間	0.4	9.0	10.0	2.7	8.2	6.4	20.8	6.1	1.4	0.9
4時間	3.3	4.6	5.6	0.5	2.3	3.2	9.7	3.4	0.3	0.3
5時間	13.0	3.1	6.4	0.0	1.0	1.7	8.5	1.4	0.0	0.0
6時間	34.0	1.4	4.2	0.1	0.1	1.0	5.4	0.5	0.1	0.1
7時間	30.3	0.7	2.3	0.0	0.3	0.3	2.5	0.5	0.0	0.0
8時間	12.9	1.1	1.3	0.0	0.2	0.1	1.6	0.5	0.0	0.0
9時間	1.9	0.0	0.2	0.0	0.0	0.1	0.3	0.0	0.0	0.0
10時間	1.2	0.1	0.8	0.0	0.1	0.1	1.2	0.2	0.0	0.0
10時間より多い	0.7	0.3	4.1	0.1	0.2	0.4	2.4	0.7	0.1	0.1
平均時間	6時間20分	1時間23分	2時間23分	27分	1時間6分	1時間3分	3時間7分	1時間6分	19分	18分

注1 平均時間は「しない」を0分、「1時間」を60分、「10時間より多い」を660分のように置き換えて算出。

注2 調査対象者全体(918名)を分析。

2 大学生の学習の実態と意識

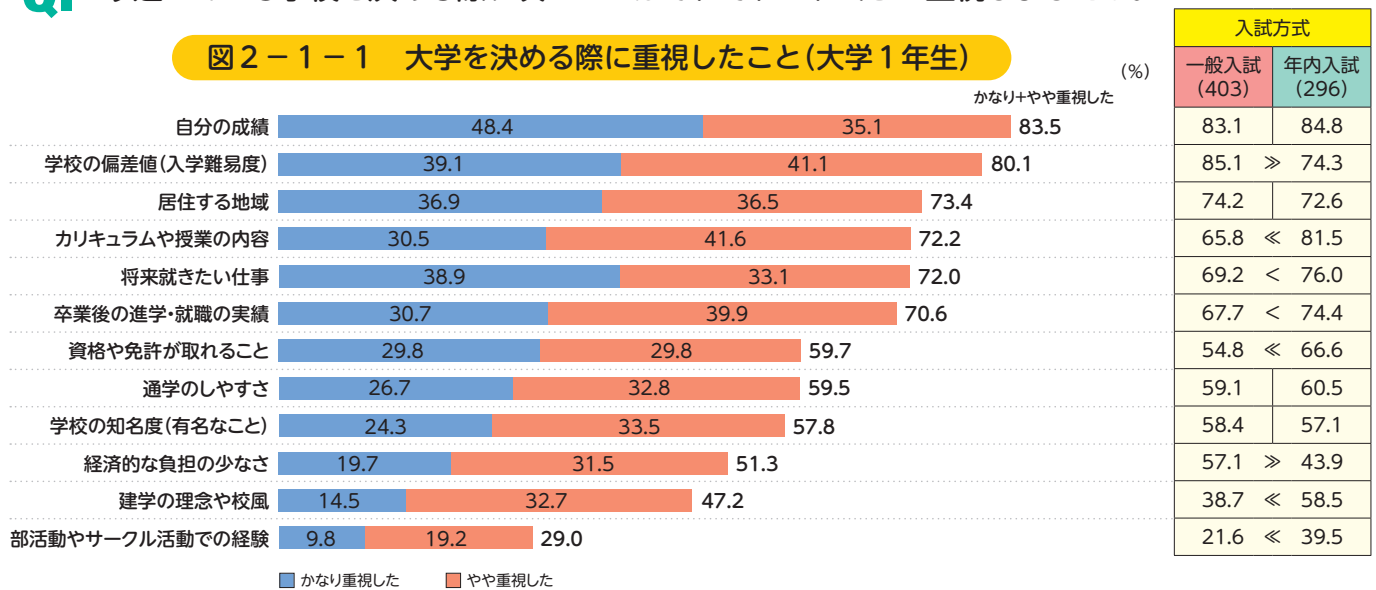
①入学前の様子

大学を決める際に重視したことは入試方式によって異なる

大学進学者に「大学を決める際に重視したこと」をたずねた結果を入試方式別にみると、一般入試の学生は「学校の偏差値」や「経済的な負担の少なさ」を、年内入試の学生は「カリキュラムや授業の内容」「資格や免許が取れること」「建学の理念や校風」などを重視する傾向が強い。また、受けた入学前教育をみると、年内入試の学生は「高校までの学習内容の復習」「大学で学ぶ内容の予習」などの学習内容に関する指導が、一般入試の学生は「学習や生活に関するオリエンテーション」「学校施設やポータルサイトの使い方」など入学準備にかかわる指導が多い。

Q. 今通っている学校を決める際、次のことはそれぞれどれくらい重視しましたか。

図2-1-1 大学を決める際に重視したこと(大学1年生)



注1 項目は「かなり重視した」+「やや重視した」の数値の降順に示した。

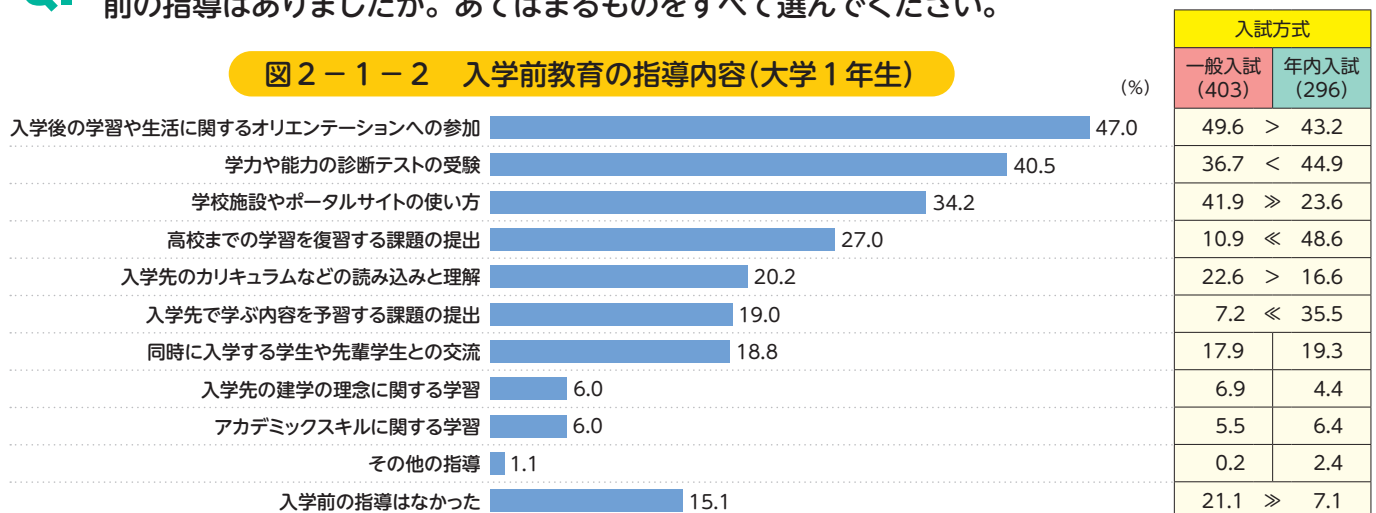
注2 「一般入試」と「年内入試」の数値は「かなり重視した」+「やや重視した」の%。

注3 「入試方式」は、「一般入試(大学入学共通テストの利用を含む)」を選択した人を「一般入試」とし、「一般推薦(公募推薦)」「指定校推薦」「附属校(付属校)推薦」「AO入試(総合型選抜)」を選択した人を「年内入試」として算出(p5基本属性の「入試方式」を参照)。

注4 2024年3月時点で、「短期大学」「四年制大学」「六年制大学」に通っている大学1年生704名を対象に分析。

Q. 今通っている学校への入学が決まり、入学式が行われるまでの間に、進学先から次のような入学前の指導はありましたか。あてはまるものをすべて選んでください。

図2-1-2 入学前教育の指導内容(大学1年生)



注1 複数回答。

注2 項目は全体値の降順に示した。

注3 「入試方式」は、「一般入試(大学入学共通テストの利用を含む)」を選択した人を「一般入試」とし、「一般推薦(公募推薦)」「指定校推薦」「附属校(付属校)推薦」「AO入試(総合型選抜)」を選択した人を「年内入試」として算出(p5基本属性の「入試方式」を参照)。

注4 2024年3月時点で、「短期大学」「四年制大学」「六年制大学」に通っている大学1年生704名を対象に分析。

※入試方式別の数値では、5ポイント以上の差があるものに>、<、10ポイント以上差があるものに>>、<<の記号をつけている(図2-1-1、2)。

2 大学生の学習の実態と意識

②学習時間

4割の学生が、ふだん「自主的な学習」をしていない

大学生(1年生)の平日1日あたりの平均学習時間は、「学校の授業に出る」が4時間56分、「学校の授業の予習・復習・課題をする」が1時間10分であるのに対し、「自主的な学習をする」は38分だった。「授業の予習・復習・課題」は1割が、「自主的な学習」は4割が「しない」と回答している。「授業の予習・復習・課題」時間は、年内入試の学生よりも一般入試の学生のほうが若干長いが、「学校の授業に出る」時間は、年内入試の学生のほうが長い。また、「授業の予習・復習・課題」時間も「学校の授業に出る」時間も、文系の学生より理系の学生のほうが長い傾向だ。一方で、「自主的な学習をする」時間は入試方式や文系・理系による差がみられなかった。

Q. あなたはふだん(学校や予備校、仕事がある日)、次のことをそれぞれ1日にどれくらいの時間やっていますか。日によって違うときは、平均してだいたいの時間を教えてください。

図2-2-1 学習時間(大学生)

(%)

	学校の授業に出る	学校の授業の予習・復習・課題をする	自主的な学習をする
しない	1.7	11.4	39.4
5分	0.6	1.4	2.0
10分	0.6	2.8	4.5
15分	0.3	2.8	5.4
30分	0.1	14.0	15.2
1時間	0.4	39.2	22.7
2時間	1.7	20.7	6.5
3時間	10.2	4.8	2.8
4時間	23.8	1.7	0.7
5時間	24.7	0.6	0.0
6時間	21.3	0.3	0.3
7時間	8.0	0.0	0.1
7時間より多い	6.6	0.3	0.4
平均時間	4時間56分	1時間10分	38分

注1 「7時間より多い」は「8時間」+「9時間」+「10時間」+「10時間より多い」。

注2 2024年3月時点で、「短期大学」「四年制大学」「六年制大学」に通っている709名を対象に分析。

表2-2-1 平均学習時間(1日あたり)(大学生)

	入試方式別		文系・理系別	
	一般入試(403)	年内入試(296)	文系(346)	理系(273)
学校の授業に出る	4時間47分	5時間8分	4時間47分	5時間8分
学校の授業の予習・復習・課題をする	1時間13分	1時間6分	1時間1分	1時間19分
自主的な学習をする	39分	37分	36分	38分

注1 平均時間は「しない」を0分、「1時間」を60分、「10時間より多い」を660分のように置き換えて算出。

注2 「入試方式」は、「一般入試(大学入学共通テストの利用を含む)」を選択した人を「一般入試」とし、「一般推薦(公募推薦)」「指定校推薦」「附属校(付属校)推薦」「AO入試(総合型選抜)」を選択した人を「年内入試」として算出(p5基本属性の「入試方式」を参照)。

注3 「文系・理系」は、「はっきり文系」「どちらかといえば文系」を選択した人を「文系」、「はっきり理系」「どちらかといえば理系」を選択した人を「理系」として算出。「文系と理系の両方(文理融合)」を選択した人が少ないため、分析から除外した。

注4 2024年3月時点で、「短期大学」「四年制大学」「六年制大学」に通っている709名を対象に分析。

2 大学生の学習の実態と意識

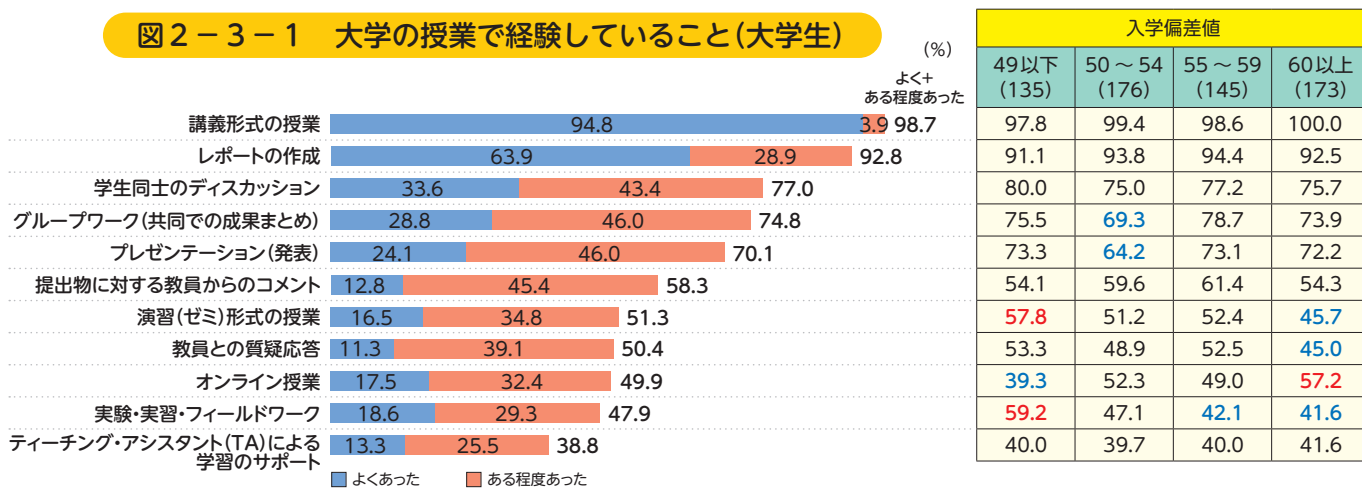
③大学での学び

7割の学生が授業でディスカッションやグループワークを経験

大学の授業で経験していることで多いのは、「講義形式」「レポートの作成」「ディスカッション」「グループワーク」などで、これらは7割を超える。一方で、調査対象者がまだ1年生であるため、「演習形式」「実験・実習・フィールドワーク」などは5割前後である。大学での学びでは、課題解決の「方法を考える」「情報を集める」といった活動や「デジタル端末を使う」機会などが8割を超える。「進路について調べる」「社会に触れる」などは入学偏差値の低い大学に多く、「外国語」を使った学びは入学偏差値が高い大学に多い。

Q. この1年間(昨年の4月からこの3月まで)の学校の授業で、次のような機会がそれぞれどれくらいありましたか。

図2-3-1 大学の授業で経験していること(大学生)



注1 項目は「よくあった」+「ある程度あった」の数値の降順に示した。

注2 入学偏差値別の数値は「よくあった」+「ある程度あった」の%。

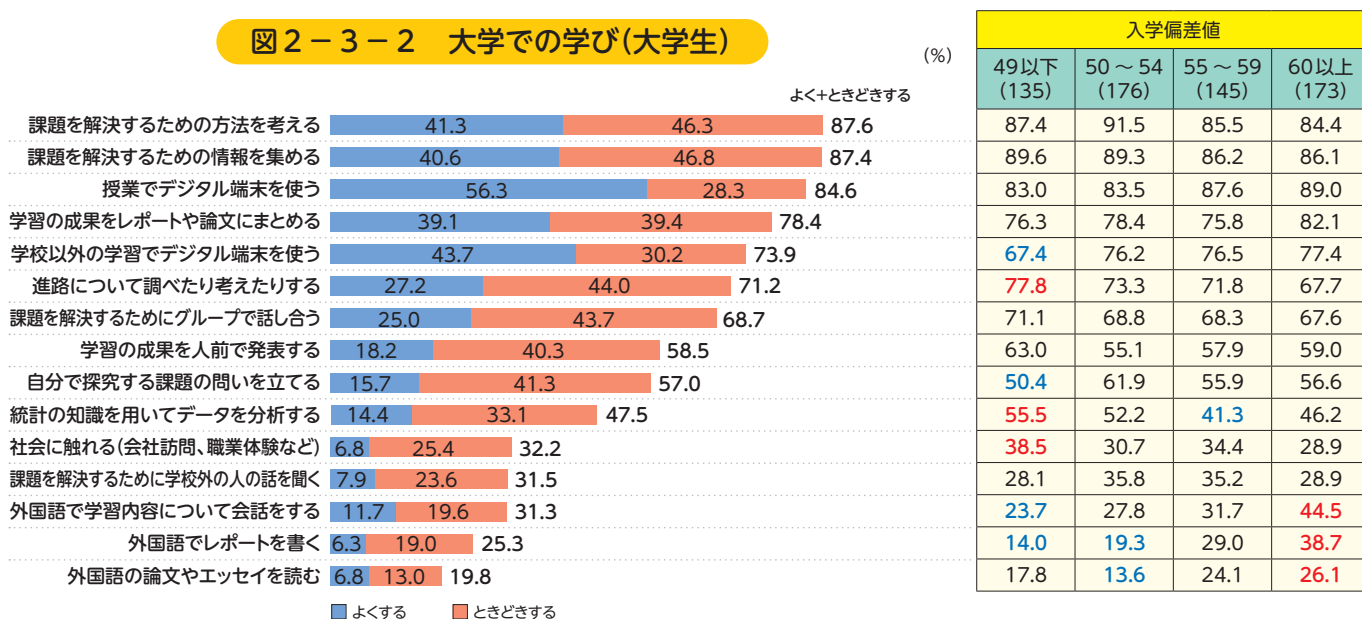
注3 「入学偏差値」は、回答者本人の自己評価による(p5基本属性の「入学偏差値」を参照)。

注4 入学偏差値別の数値では「よくあった」+「ある程度あった」の合計より、5ポイント以上高いものを赤色に、5ポイント以上低いものを青色にしている。

注5 横棒は2024年3月時点で、「短期大学」「四年制大学」「六年制大学」に通っている709名を対象に分析。

Q. あなたは今の学校での学びで、次のようなことをそれぞれどれくらいしていますか。

図2-3-2 大学での学び(大学生)



注1 項目は「よくする」+「ときどきする」の数値の降順に示した。

注2 入学偏差値別の数値は「よくする」+「ときどきする」の%。

注3 「入学偏差値」は、回答者本人の自己評価による(p5基本属性の「入学偏差値」を参照)。

注4 入学偏差値別の数値では「よくする」+「ときどきする」の合計より、5ポイント以上高いものを赤色に、5ポイント以上低いものを青色にしている。

注5 横棒は2024年3月時点で、「短期大学」「四年制大学」「六年制大学」に通っている709名を対象に分析。

2 大学生の学習の実態と意識

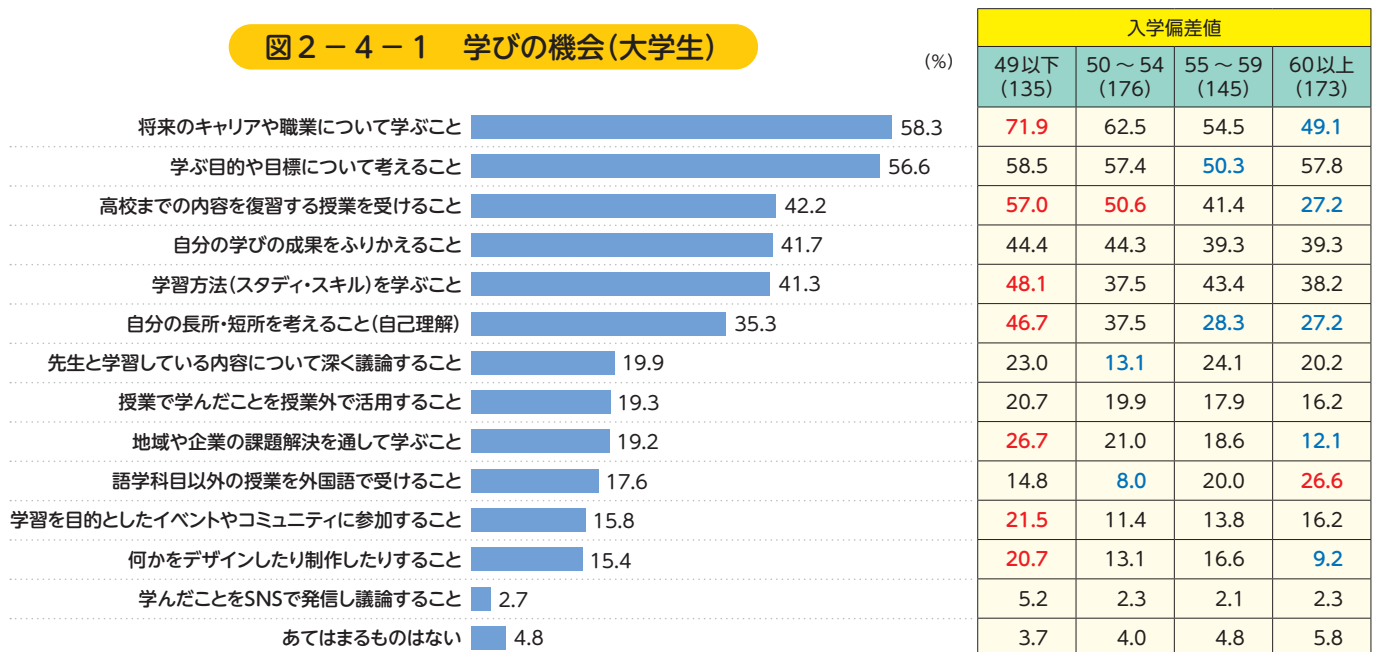
④学びの機会や経験

6割の学生が「キャリアや職業について学ぶ」機会を経験

この1年間にあった学ぶ機会では、「将来のキャリアや職業について学ぶ」がもっとも多く、6割が選択している。「学ぶ目的や目標について考える」のは6割弱が経験しているが、「学びの成果をふりかえる」を選択した学生は約4割だった。「将来のキャリアや職業について学ぶ」「自分の長所・短所を考える」「地域や企業の課題解決を通して学ぶ」などの活動は、入学偏差値が低い大学の学生ほど経験している。また、1年間の経験をたずねたところ、もっとも多かったのは「資格や免許の取得」(5割弱)で、「学外の友人・ネットワークづくり」(3割)が続く。

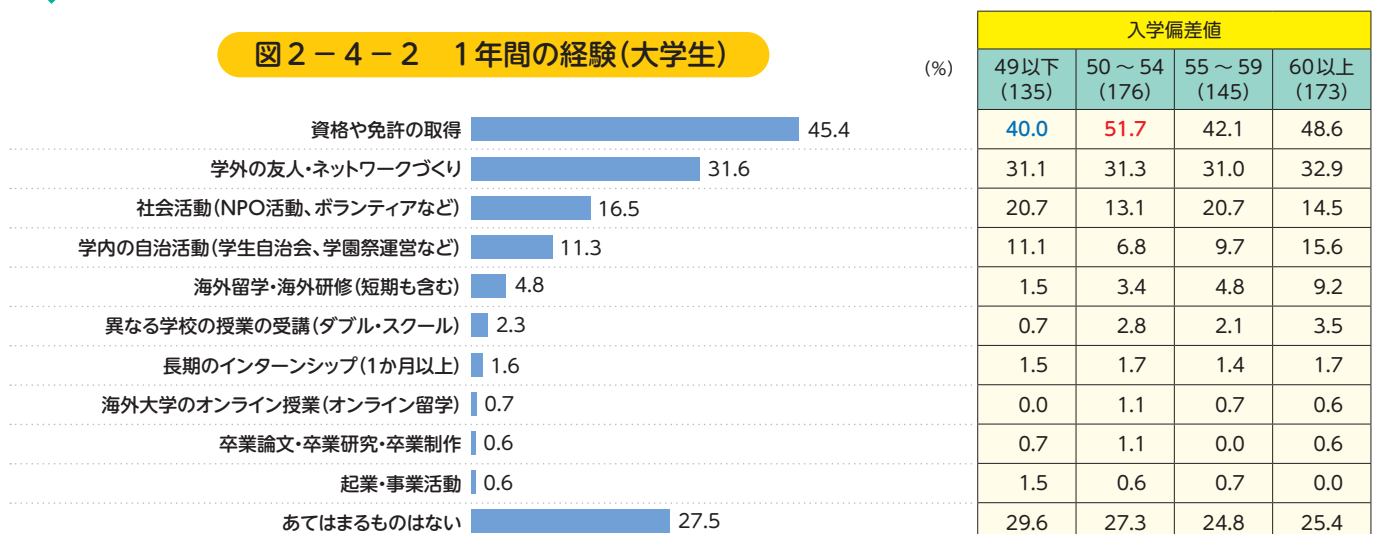
Q. あなたはこの1年間で、次のような学ぶ機会がありましたか。あてはまるものをすべて選んでください。

図2-4-1 学びの機会(大学生)



Q. あなたはこの1年間で、次のようなことをしましたか。あてはまるものをすべて選んでください。

図2-4-2 1年間の経験(大学生)



※以下は図2-4-1, 2に共通する注記

注1 複数回答。

注2 項目は全体値の降順に示した。

注3 「入学偏差値」は、回答者本人の自己評価による(p5基本属性の「入学偏差値」を参照)。

注4 入学偏差値別の数値では、全体値より5ポイント以上高いものを赤色に、5ポイント以上低いものを青色にしている。

注5 横棒は2024年3月時点で、「短期大学」「四年制大学」「六年制大学」に通っている709名を対象に分析。

2 大学生の学習の実態と意識

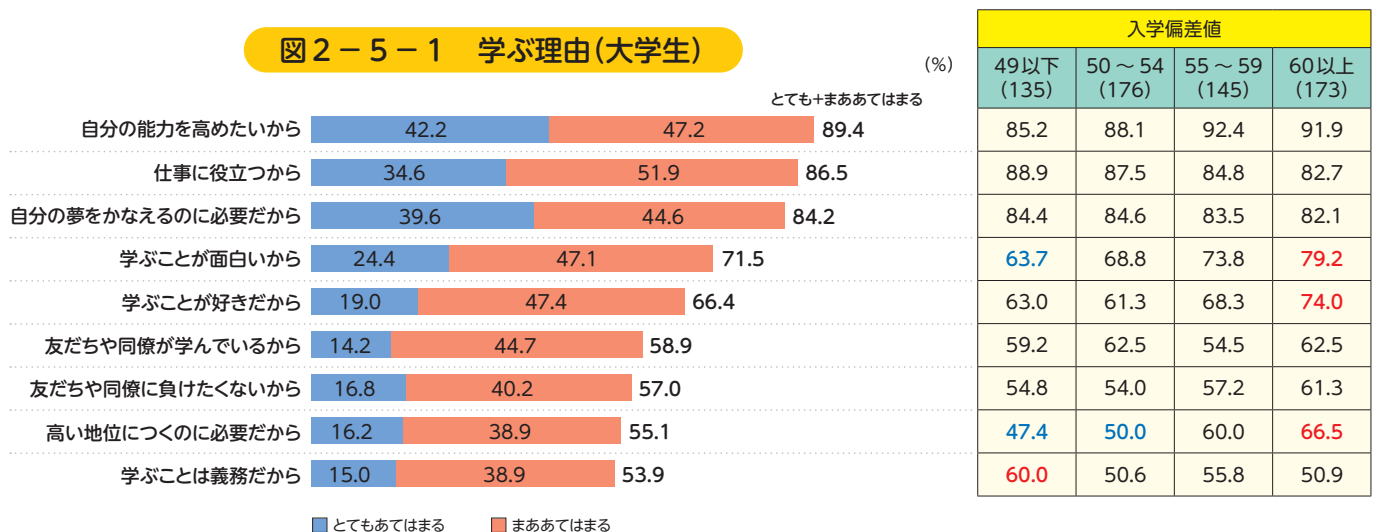
⑤学習動機

9割の学生が「自分の能力を高めたいから」と回答

学ぶ理由をたずねたところ、「自分の能力を高めたいから」「仕事に役立つから」「自分の夢をかなえるのに必要だから」と回答した学生は8～9割弱だった。「学ぶことが面白いから」「学ぶことが好きだから」といった内発的動機づけにかかわる項目を選択した学生は約7割、「高い地位につくのに必要だから」といった地位達成にかかわる項目を選択した学生は5割強で、これらは入学偏差値が高い大学の学生に多い。こうした学習動機について文系・理系による違いをみると、理系の学生のほうが「仕事に役立つから」などの選択率が高い傾向があった。

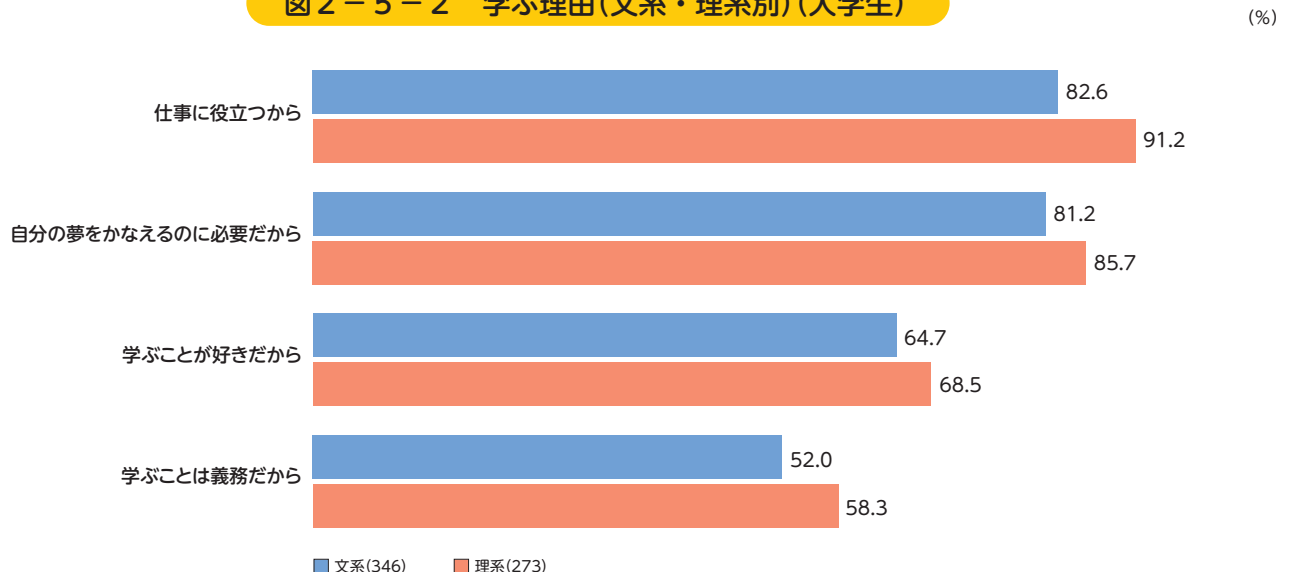
Q. あなたが「学ぶ」理由について、次のことはそれぞれどれくらいあてはまりますか。
※仕事を覚えることや自己啓発、趣味の勉強も含めて、あなたが考えている学ぶことでお答えください。

図2-5-1 学ぶ理由(大学生)



注1 項目は「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の数値の降順に示した。
注2 入学偏差値別の数値は「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。
注3 「入学偏差値」は、回答者本人の自己評価による(p5基本属性の「入学偏差値」を参照)。
注4 入学偏差値別の数値では「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の合計より、5ポイント以上高いものを赤色に、5ポイント以上低いものを青色にしている。
注5 横棒は2024年3月時点で、「短期大学」「四年制大学」「六年制大学」に通っている709名を対象に分析。

図2-5-2 学ぶ理由(文系・理系別)(大学生)



注1 「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。
注2 「文系・理系」は、「はっきり文系」「どちらかといえば文系」を選択した人を「文系」、「はっきり理系」「どちらかといえば理系」を選択した人を「理系」として算出。「文系と理系の両方(文理融合)」を選択した人が少ないため、分析から除外した。
注3 2024年3月時点で、「短期大学」「四年制大学」「六年制大学」に通っている709名を対象に分析。

2 大学生の学習の実態と意識

⑥大学教育に対する意見

8割の学生が「講義形式の授業が多いほうがよい」を選択

大学教育に対する意見について、【A】と【B】の対立する項目を示してどちらがよいかを選択してもらったところ、①授業形式では「講義形式を多く」が8割と多数派になったが、②学びのスタイルでは「答えのない問題を探究」が6割で多かった。また、⑧責任の所在では「学生の責任」が8割と多いものの、④就職活動や⑥学習の方法では大学の指導を期待する意見と学生自身の自主性を重視する意見が二分された。⑤授業の選択についても、「興味がなくとも楽に単位」と「単位が難しくても興味ある授業」が半々に分かれている。

Q. 学校での教育について、あなたは次にあげるA、Bのどちらの考え方に近いですか。それぞれ近いものをお選びください。

図2-6-1 大学教育に対する意見(大学生)

(%)

①授業形式(【A】講義形式を多く、【B】演習形式を多く)



②学びのスタイル(【A】答えのない問題を探究、【B】学問を体系的に修得)



③学びの範囲(【A】幅広い分野の知識や技能、【B】専門分野の知識や技能)



④就職活動(【A】学校の指導・支援にもとづく、【B】学生の自主性にもとづく)



⑤授業の選択(【A】興味がなくとも楽に単位、【B】単位が難しくても興味ある授業)



⑥学習の方法(【A】大学の授業で指導、【B】学生が自分で工夫)



⑦キャリア形成(【A】将来を決めて受講、【B】授業を通じて探索)



⑧責任の所在(【A】大学の責任、【B】学生の責任)



注1 帯グラフは「【A】」の数値の降順に示した。

注2 「かなり【A】に近い」「【A】に近い」「どちらかといえば【A】に近い」を選択した人を「【A】」、「かなり【B】に近い」「【B】に近い」「どちらかといえば【B】に近い」を選択した人を「【B】」として数値を算出。

注3 2024年3月時点で、「短期大学」「四年制大学」「六年制大学」に通っている709名を対象に分析。

2 大学生の学習の実態と意識

⑦通っている大学に対する評価

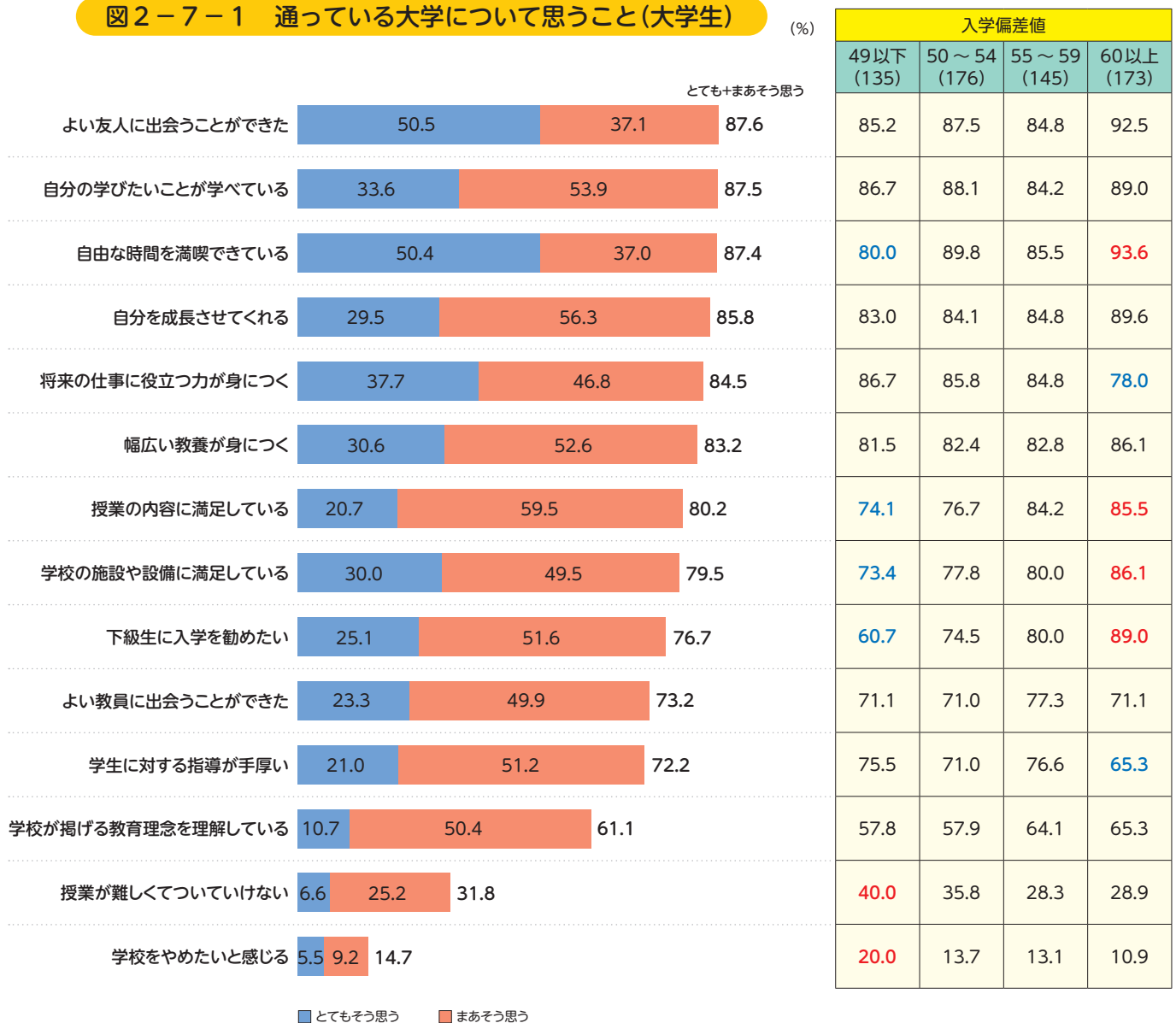
8割超の学生が「自分を成長させてくれる」と高く評価

現在通っている大学に対しては、「よい友人に出会うことができた」「自分の学びたいことが学べている」「自由な時間を満喫できている」「自分を成長させてくれる」「将来の仕事に役立つ力が身につく」「幅広い教養が身につく」「授業の内容に満足している」などの項目で「そう思う(とても+まあ)」が8割を超え、多くの学生が高く評価している。ただし、今回の調査対象である大学1年生の時点で「授業が難しくついていけない」が3割、「学校をやめたいと感じる」が1割以上いて、早い段階から配慮が必要な学生も一定数存在していることがわかる。

Q. あなたは、今通っている学校について次のことはそれぞれどう思いますか。

図2-7-1 通っている大学について思うこと(大学生)

(%)



注1 項目は「とてもそう思う」+「まあそう思う」の数値の降順に示した。

注2 入学偏差値別の数値は「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。

注3 「入学偏差値」は、回答者本人の自己評価による(p5基本属性の「入学偏差値」を参照)。

注4 入学偏差値別の数値では「とてもそう思う」+「まあそう思う」の合計より、5ポイント以上高いものを赤色に、5ポイント以上低いものを青色にしている。

注5 横棒は2024年3月時点で、「短期大学」「四年制大学」「六年制大学」に通っている709名を対象に分析。

2 大学生の学習の実態と意識

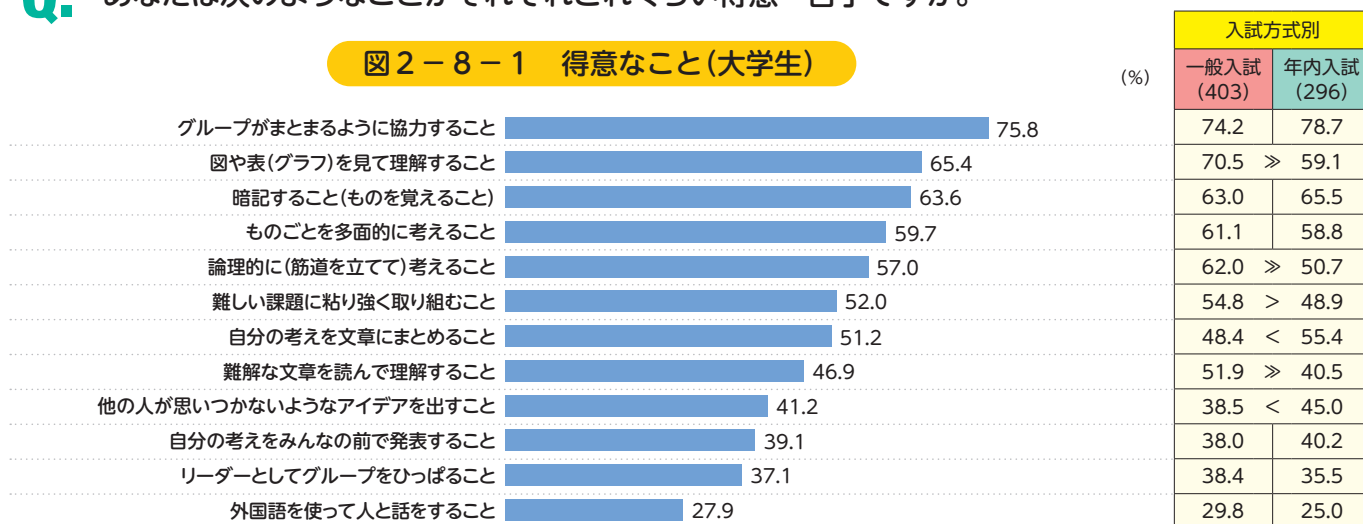
⑧ 資質・能力に関する自己評価

入試方式によって資質・能力の自己評価に違いがみられる

資質・能力について自己評価をしてもらったところ、「グループがまとまるように協力」「図や表を見て理解」「暗記」の項目で「得意(とても+やや)」が6割を超えた。入試方式によって違いがみられる部分があり、「図や表を見て理解」「論理的に考える」「難解な文章を読んで理解」などは一般入試の学生の評価が高い一方で、「自分の考えを文章にまとめる」「他の人が思いつかないようなアイデアを出す」といった項目では年内入試の学生の評価が高かった。入試方式によって求められる資質・能力の違いが、自己評価に影響している可能性がある。

Q. あなたは次のようなことがそれぞれどれくらい得意・苦手ですか。

図 2-8-1 得意なこと(大学生)



注1 数値は、「とても得意」+「やや得意」の%。

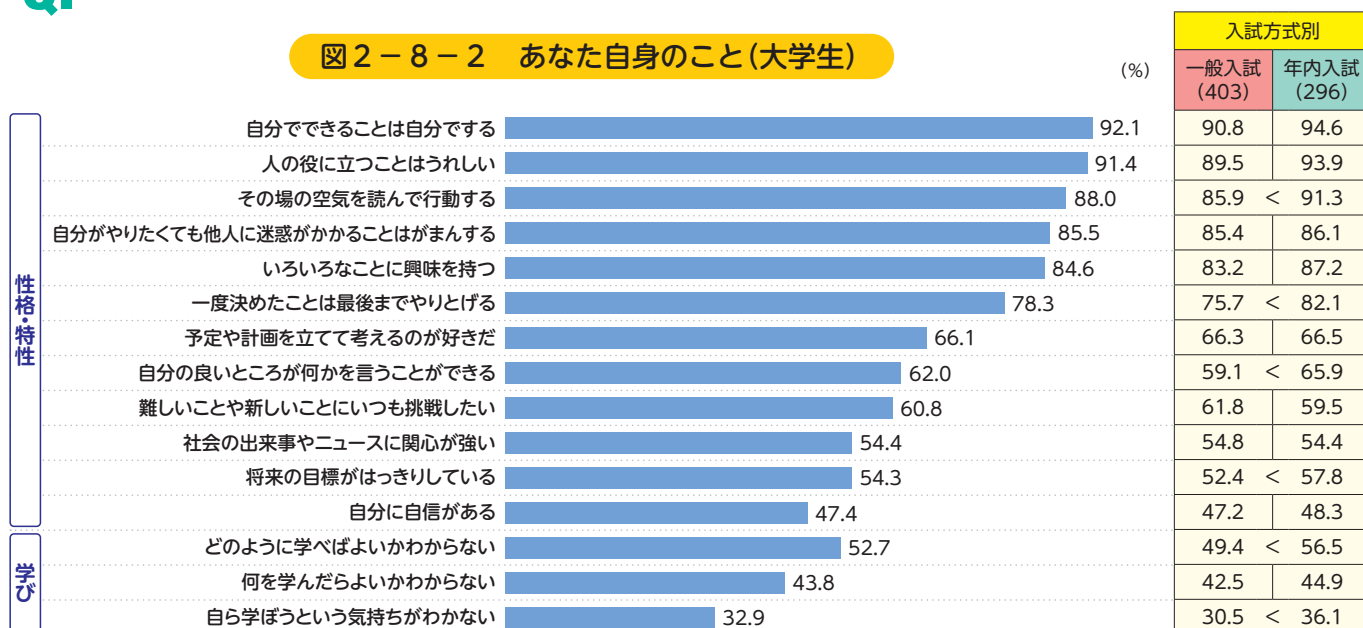
注2 項目は「とても得意」+「やや得意」の数値の降順に示した。

注3 「入試方式」は、「一般入試(大学入学共通テストの利用を含む)」を選択した人を「一般入試」とし、「一般推薦(公募推薦)」「指定校推薦」「附属校(付属校)推薦」「AO入試(総合型選抜)」を選択した人を「年内入試」として算出(p 5基本属性の「入試方式」を参照)。

注4 横棒は2024年3月時点で、「短期大学」「四年制大学」「六年制大学」に通っている709名を対象に分析。

Q. あなた自身のことについて、次のようなことはそれぞれどれくらいあてはまりますか。

図 2-8-2 あなた自身のこと(大学生)



注1 数値は、「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

注2 項目は「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の数値の降順に示した。

注3 「入試方式」は、図 2-8-1 と同様。

注4 横棒は2024年3月時点で、「短期大学」「四年制大学」「六年制大学」に通っている709名を対象に分析。

※入試方式別の数値では、5ポイント以上の差があるものに>、<、10ポイント以上差があるものに>>、<<の記号をつけている(図 2-8-1, 2)。

3 将来展望や満足度

①就労観

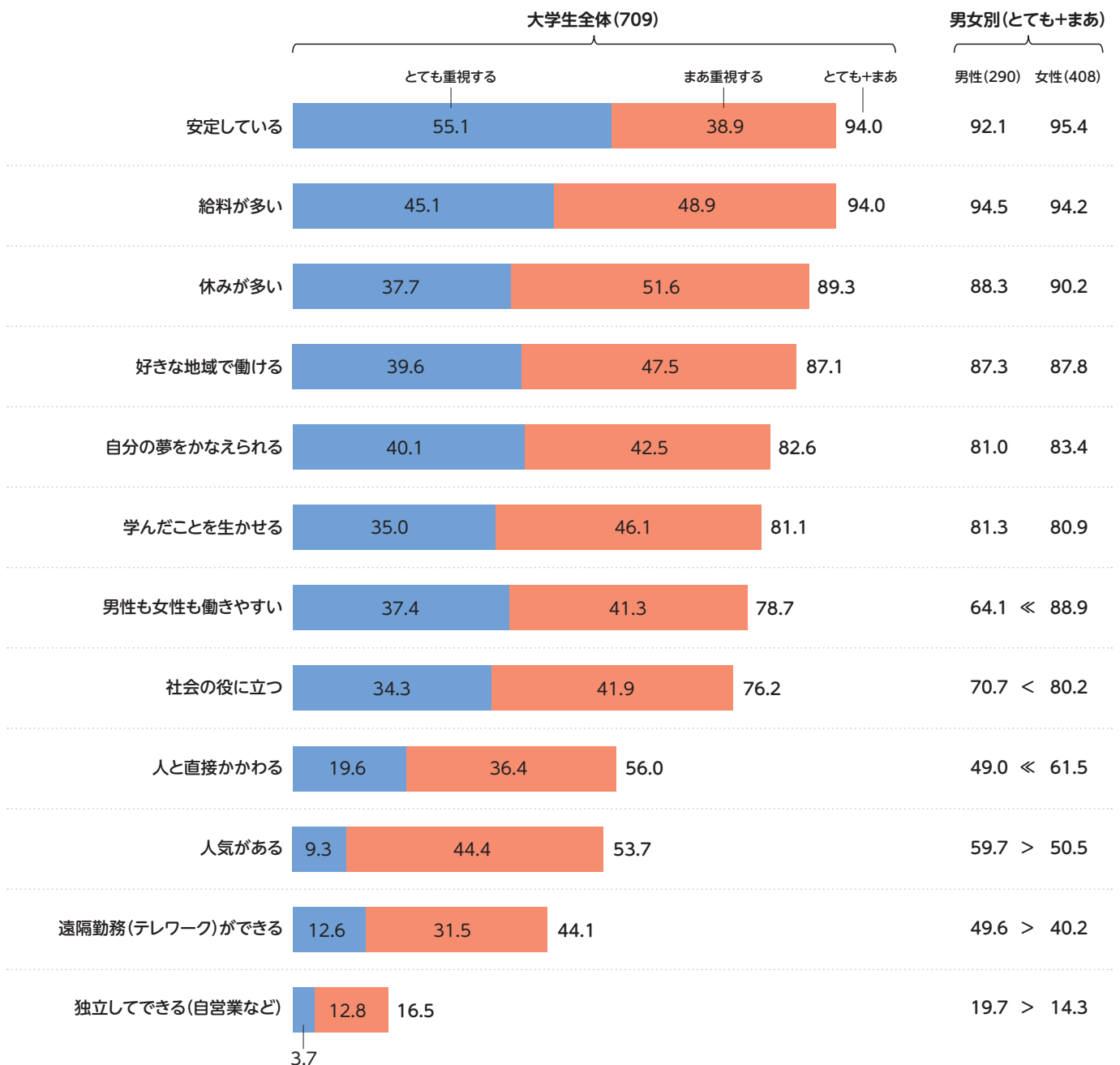
9割の学生が職業選択で「安定性」「給料」「休み」を重視

職業や勤務先を選ぶ際に重視すること多いのは、「安定している」「給料が多い」「休みが多い」などで9割前後が選択している。これに、「好きな地域で働ける」「自分の夢をかなえられる」「学んだことを生かせる」などが続く。これらの項目は男女差が少ないが、「男性も女性も働きやすい」「人と直接かかわる」「社会の役に立つ」は女性の方が、「遠隔勤務(テレワーク)ができる」「人気がある」「独立してできる」は男性の方が、「重視する(とても+まあ)」の比率が高い。

Q. あなたは、職業や勤務先を選ぶとき、次のことをそれぞれどれくらい重視しますか。
※アルバイト先ではなく、今後就職の際のことをイメージして教えてください。

図3-1-1 職業選択で重視すること(大学生)

(%)



注1 項目は「とても重視する」+「まあ重視する」の数値の降順に示した。

注2 性別の数値では、5ポイント以上の差があるものに>、<、10ポイント以上差があるものに>、<の記号をつけている。

注3 2024年3月時点で、「短期大学」「四年制大学」「六年制大学」に通っている709名を対象に分析。

3 将来展望や満足度

②将来に対する意識

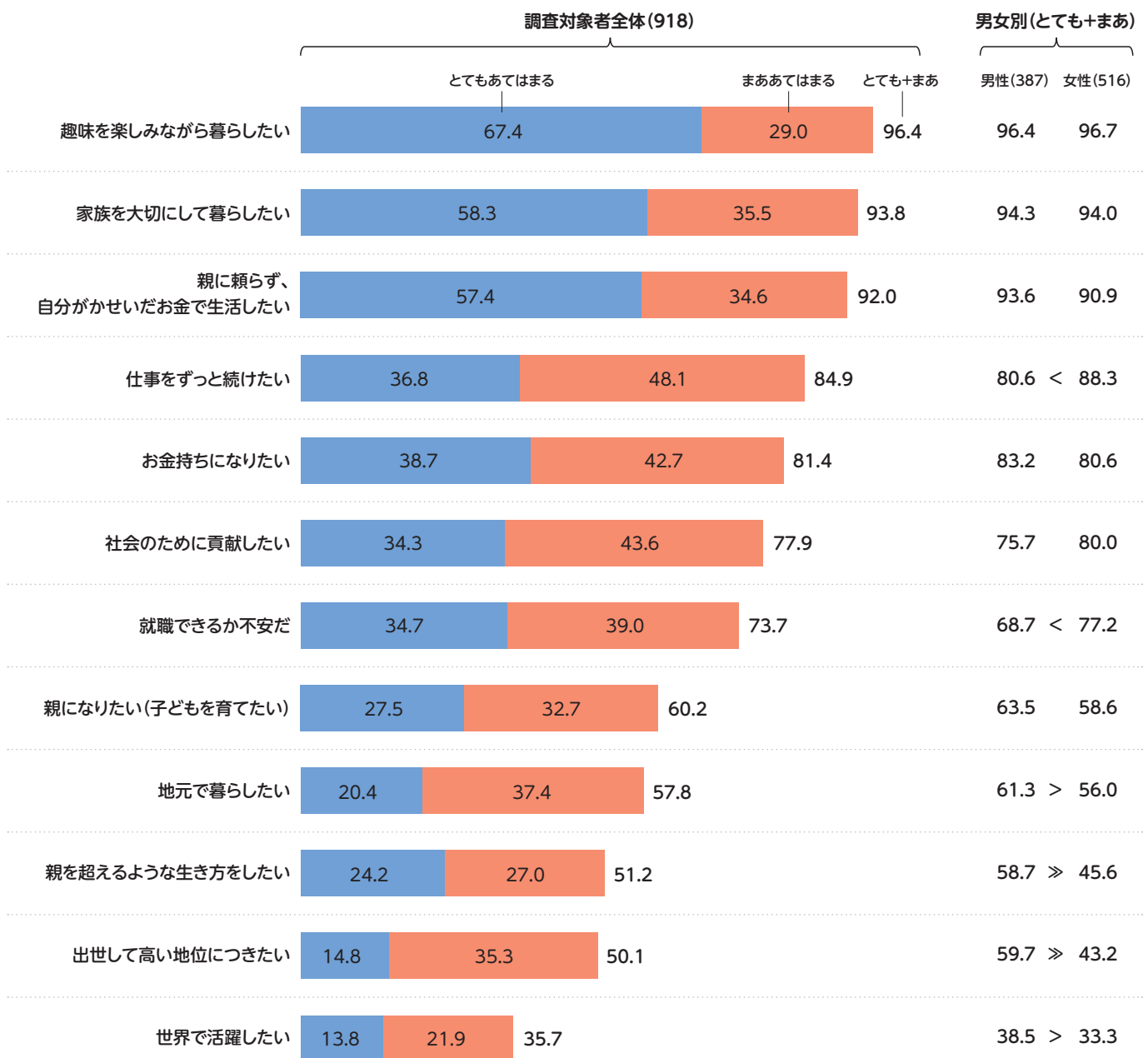
「就職できるか不安だ」と感じる人は7割

若者(調査対象者全体)の将来に対する意識では、「趣味を楽しみながら暮らしたい」「家族を大切に暮らしたい」「親に頼らず、自分がかせいだお金で生活したい」の肯定率が高く、「あてはまる(とても+まあ)」の割合は9割を超える。これらは男女を問わず肯定している。男女別では、女性ほど「就職できるか不安だ」や「仕事をずっと続けたい」の割合が高く、男性は「出世して高い地位につきたい」「親を超えるような生き方をしたい」「地元で暮らしたい」「世界で活躍したい」の割合が高かった。

Q. あなた自身の将来について、次のことはそれぞれどれくらいあてはまりますか。

図3-2-1 将来に対する意識(調査対象者全体)

(%)



注1 項目は「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の数値の降順に示した。

注2 性別の数値では、5ポイント以上の差があるものに>、<、10ポイント以上差があるものに≫、≪の記号をつけている。

注3 「就職できるか不安だ」については、「社会人(有職者)」を選択した人を除いて算出。また、「親になりたい(子どもを育てたい)」については、「未婚・子どもあり」「既婚・子どもあり」「死別・子どもあり」「離別(離婚)・子どもあり」を選択した人を除いて算出。上記の2項目以外は、調査対象者全体(918名)を分析。

3 将来展望や満足度

③能力や社会に対する意識

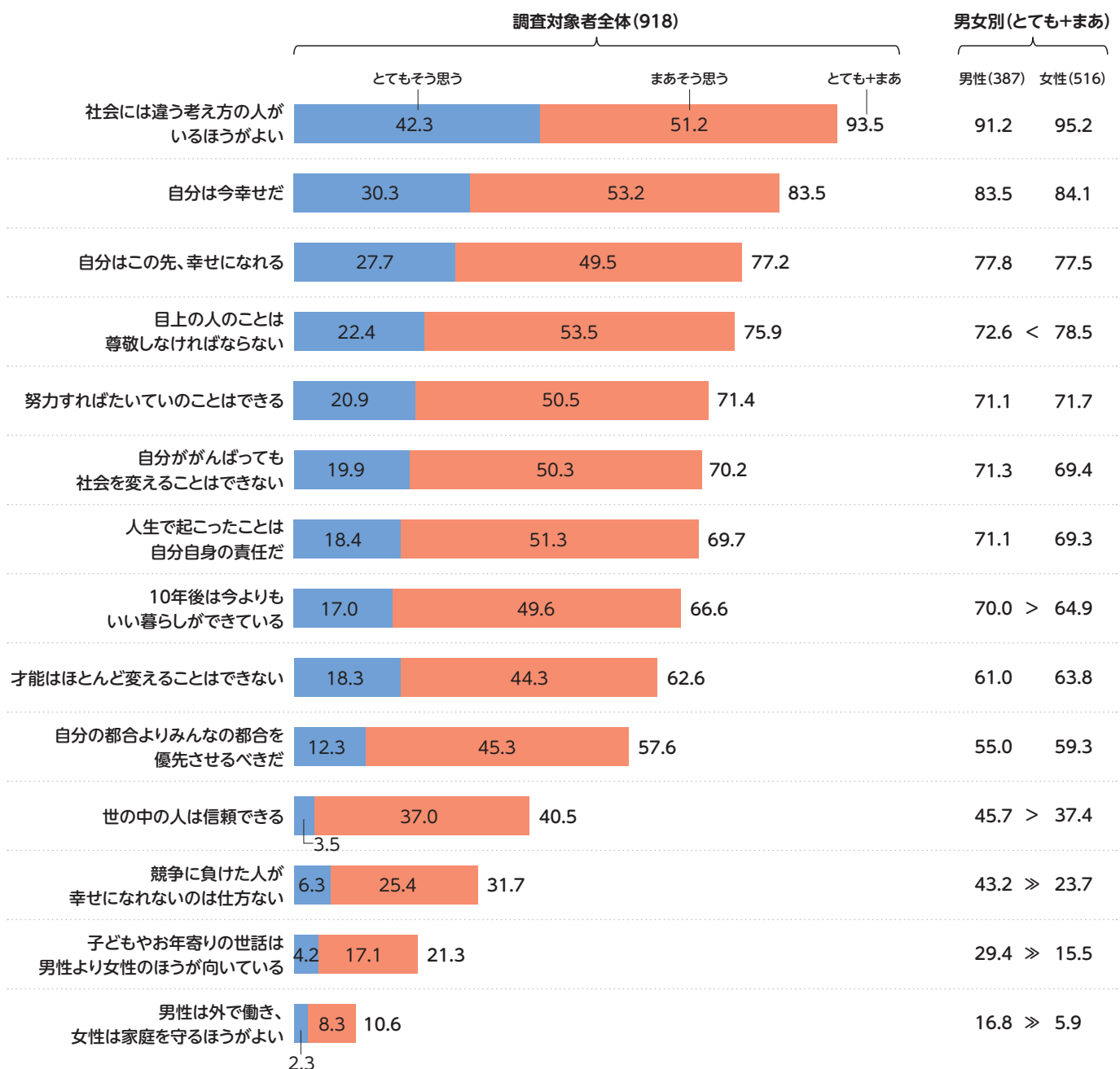
若者の8割が「今、幸せ」「この先、幸せになれる」と回答

能力や社会に対する意識では、「社会には違う考え方の人がいるほうがよい」と多様性を肯定する若者が9割を超える。また、「自分は今、幸せだ」「自分はこの先、幸せになれる」を肯定する割合も、8割前後と高い。男女による違いをみると、女性は「目上の人へのことは尊敬しなければならない」の肯定率が男性より高く、男性は「世の中の人は信頼できる」「競争に負けた人が幸せになれないのは仕方ない」「子どもやお年寄りの世話は男性より女性のほうが向いている」「男性は外で働き、女性は家庭を守るほうがよい」などの肯定率が女性より高かった。

Q. あなたは、次のことについてそれぞれどう思いますか。

図3-3-1 能力や社会に対する意識(調査対象者全体)

(%)



注1 項目は「とても思う」+「まあ思う」の数値の降順に示した。

注2 性別の数値では、5ポイント以上の差があるものに>、<、10ポイント以上差があるものに»、«の記号をつけている。

注3 調査対象者全体(918名)を分析。

3 将来展望や満足度

④結婚に対する意識

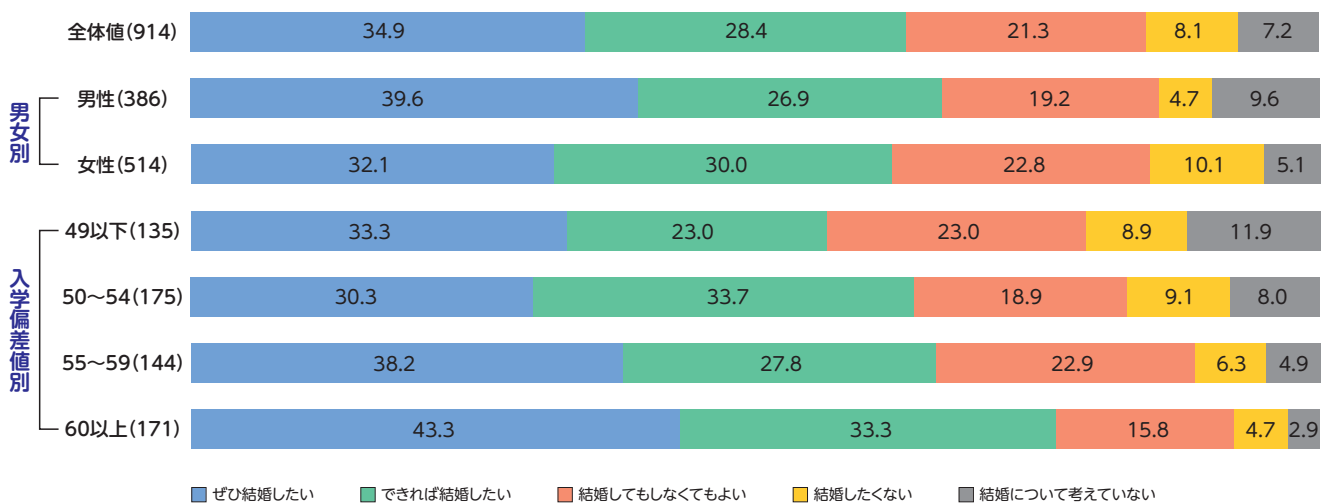
将来「結婚したい」と考えている若者は全体の6割

結婚に対する意識をたずねたところ、「結婚したい(ぜひ+できれば)」と考える人は6割で、「結婚してもしなくてもよい」が2割、「結婚したくない」「結婚について考えていない」はそれぞれ1割弱だった。男女別にみると、「結婚したくない」は女性が多いのに対して、「ぜひ結婚したい」は男性に多い。大学生を対象に入学偏差値による違いを見たところ、偏差値が高い大学の学生ほど「結婚したい」と回答した人が多かった。ライフコースに対する意識では、「子どもを持ち、夫婦とも仕事を続ける」と考える人は6割強で、男性のほうがやや多い結果となった。

Q. あなたの結婚についてのお考えに一番近いものを教えてください。

図3-4-1 結婚に対する意識

(%)

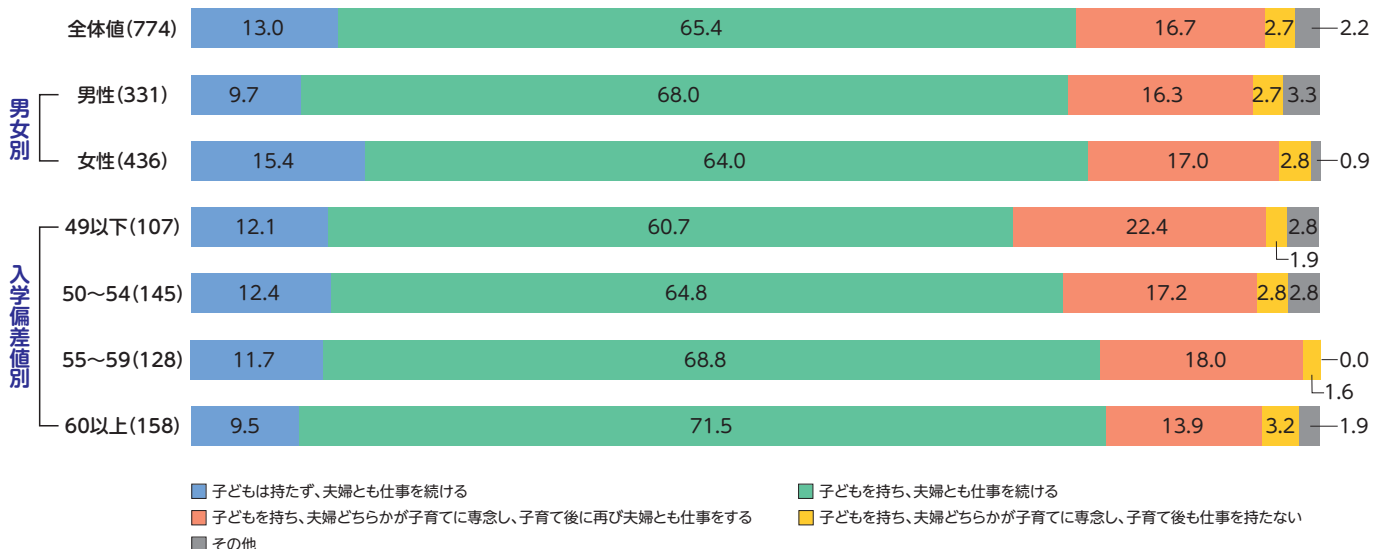


注 婚姻状況を尋ねた質問で、「既婚・子どもなし」「既婚・子どもあり」と回答した人を除いた914名を分析。

Q. もしあなたが結婚した場合、結婚後の理想に一番近いものを教えてください。
※ここでの「仕事」はアルバイトやパートタイムを含む。

図3-4-2 ライフコースに対する意識

(%)



注 図3-4-1で「結婚したくない」「結婚について考えていない」を選択した人を除いて算出。

3 将来展望や満足度

⑤生活や学びに対する満足度

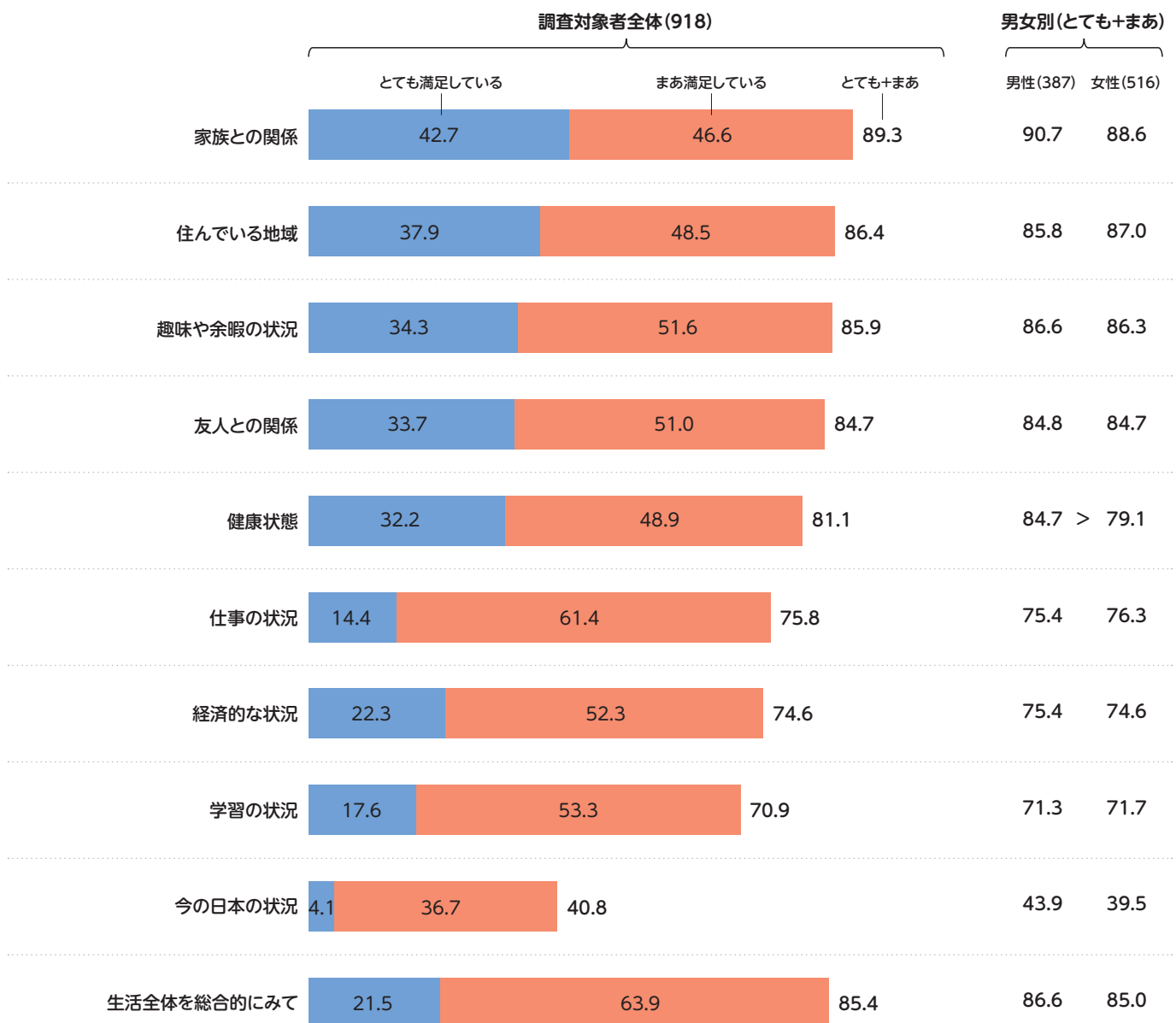
8割の若者が生活全体を総合的に見て「満足」と回答

生活や学びの満足度についてたずねたところ、「家族との関係」に「満足している(とても+まあ)」割合は9割と高かった。また、「住んでいる地域」「趣味や余暇の状況」「友人との関係」「健康状態」は8割を超え、「仕事の状況」「経済的な状況」「学習の状況」も7割を超えた。全体的に生活や学びの満足度は高いが、「今の日本の状況」だけは4割にとどまった。「生活全体を総合的にみて」回答してもらった結果では8割強が満足している。男女別では「健康状態」だけ男性の方が高かったが、それ以外にはほとんど違いはみられなかった。

Q. あなたは次のことについて、それぞれどれくらい満足していますか。

図3-5-1 生活や学びの満足度(調査対象者全体)

(%)



注1 「生活全体を総合的にみて」以外、項目は「とても満足している」+「まあ満足している」の降順に示す。

注2 性別の数値では、5ポイント以上の差があるものに>、<の記号をつけている。

注3 「仕事の状況」については、「社会人(有職者)」を選択した人、あるいは、収入がある仕事(学生アルバイトを含む)をしているかをたずねた質問で、「している」を選択した653人を対象に分析。「仕事の状況」以外の項目については、調査対象者全体(918名)を分析。

東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所 共同研究 「若者の生活と学び」研究プロジェクト

調査企画・分析メンバー

研究プロジェクト代表

佐藤 香(東京大学社会科学研究所 教授)

野澤 雄樹(ベネッセ教育総合研究所 所長)

ボード会議メンバー ※50音順

石田 浩(東京大学社会科学研究所 特別教授)

濱中 淳子(早稲田大学 教授)

大島 真夫(東京理科大学 准教授)

藤原 翔(東京大学社会科学研究所 准教授)

大野 志郎(東京大学社会科学研究所 特任准教授)

松下 佳代(京都大学 教授)

木村 治生(ベネッセ教育総合研究所 主席研究員)

松本 留奈(ベネッセ教育総合研究所 主任研究員)

田中 孝平(北海道大学 助教)

山田 剛史(関西大学 教授)

ベネッセ教育総合研究所スタッフ

岡部 悟志(ベネッセ教育総合研究所 主任研究員)

中島 功滋(ベネッセ教育総合研究所 主任研究員)

福本 優美子(ベネッセ教育総合研究所 研究員)

大内 初枝(ベネッセ教育総合研究所 研究スタッフ)

朝永 昌孝(ベネッセ教育総合研究所 研究員)

渡邊 未央(ベネッセ教育総合研究所 研究スタッフ)

※所属・肩書きは、2024年11月時点のものです。

研究プロジェクト WEBサイトのご案内

東京大学社会科学研究所

<https://web.iss.u-Tokyo.ac.jp/clal/>



ベネッセ教育総合研究所

<https://benesse.jp/berd/special/childedu/>



「若者の生活と学びに関する調査2024」ダイジェスト版

発行 日：2024年11月29日

発行 人：野澤 雄樹

編集 人：木村 治生

発行 所：(株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所

編集 協力：邵勤風

0HNBO5

©Benesse Educational Research and Development Institute

無断転載を禁じます。